

称号及び氏名 博士（保健学） 小川 泰弘

学位授与の日付 令和2年3月31日

論文名 統合失調症の病識と認知機能、防衛スタイル
Insight, cognitive function and defense styles in schizophrenia.

論文審査委員 主査 高畑 進一
副査 内藤 泰男
副査 石井 良平

学位論文の要旨

病識の低下は精神疾患の主要な特徴のひとつであり、特に統合失調症においてはおよそ50%~80%にみられるという報告がある。またそれは、治療関係構築の困難さやアドヒアランス（治療の継続性）の不良さだけでなく、社会機能の低さや再発率と関連していることが示唆され、長期的転帰に大きな影響をおよぼすことが指摘されている。そのため、臨床的に重要な課題として、統合失調症患者の病識低下を引き起こす要因の究明が求められているが、病識の概念は複雑ゆえに、単一の要因でそれを説明することは難しいであろう。

第一章では、その複雑とされる病識に関する概念、およびその低下を引き起こす原因論について、統合失調症患者の知見を中心に整理した。その結果、病識の概念は、研究者間で細部に至るまでは認識が共有されておらず、それぞれの定義に応じた種々の病識評価尺度が存在していた。しかしその構成に関しては互いに関連しているが区別しうる複数の次元から成るということは、一定のコンセンサスが得られていた。病識低下の原因論に関してはおよそ2つの理論的観点に分岐していた。ひとつは、脳の機能障害からどのように病識低下が生じるかを強調していた。そのモデルでは、病識低下を統合失調症に特異的な病態というよりも、慢性の精神疾患一般にみられる二次的な病態であると考えられていた。また神経心理学的な研究において、そのモデルを裏付ける知見が膨大に蓄積されていた。もう一方の分岐は、精神疾患は個々人にとって受け入れがたいスティグマの苦痛を伴うものであるということから、その疾患認識を患者のナラティブな視点に立って理解しようとするものである。病識の高さが逆説的に抑うつや絶望と関連していることから、そのモデルでは、病識低下が疾患の存在やその影響を否認することでの心理的自己防衛を反映している可能性を示唆している。しかしこれまでの研究では、前者は神経認知機能と社会認知機能それぞれの観点から病識低下を説明しているものが大半を占め、それらは互いに独立して病識に関与しているかどうかについては明らかではなかった。後者の検討ではその大半が抑うつなどを心理防衛的側面の媒介項したものであり、直接的な検討はごくわずかであった。またそれらの報告において脳の機能障害を考慮したものは確認されなかった。前者の課題に対する研究は第二章、後者に対する研究は第三章にて後述した。

第二章では、統合失調症の病識低下と神経認知機能障害、および社会認知機能障害との関連を明らかにした。35名の外来通院中の慢性統合失調症患者に対し、病識評価、神経認知機能評価、社会認知機能評価を行い、それらの相関性をSpearmanの順位相関係数を用いて分析した。その結果、病識は神経認知機能と有意に相関していたが、社会認知機能とは関連が見られなかった。神経認知機能障害と病識低下の関連については先行研究と一致す

るものであったが、社会認知機能との関連がみられなかったことは議論の余地が残されている。また病識の下位次元の中で「自己の疾患についての意識」と「精神症状についての意識」は、ワーキングメモリや記憶などの神経認知機能との関連が見られたが、「治療と服薬の必要性」はどの神経認知機能とも関連が見られなかった。この結果は、病識を構成する各次元において神経認知機能障害の影響の強いものとそうでないものがあることを示している可能性がある。

最後に第三章では、統合失調症の認知機能障害を調整した上で、病識低下と心理防衛的側面の関連を明らかにした。38名の外来通院中の慢性統合失調症患者に対し、病識評価、心理防衛的傾向の評価、神経認知機能評価、精神症状評価を行った。それらの関連について、従属変数を病識尺度の各下位次元、独立変数を心理防衛的変数、神経認知機能変数、精神症状変数としたステップワイズ重回帰分析を用いた。結果は、病識の「自己の疾患についての意識」が未熟な防衛傾向との関連を示し、未熟な防衛傾向の高いものは、むしろ自己の疾患を意識することができるという一見逆説的なものであった。統合失調症における病識は、その用語自体は insight や awareness など高次の機能を指すが、その評価は患者自身の洞察 insight というよりも態度 attitude を反映する次元が含まれている可能性が示唆された。またその次元は自己の疾患に対する受け入れという心理防衛的な側面から理解することができるかもしれない。病識の改善は臨床的に重要なアウトカムと位置付けられているが、それを治療ターゲットとする場合には、単なる認識の適切さの改善を求めるだけでなく、患者一人ひとりのナラティブな視点での受け入れや態度を考慮した治療戦略が重要であることが本研究の結果より示唆された。

論文審査結果の要旨

本研究は、精神疾患の主要な特徴のひとつである病識に着目し遂行した研究である。統合失調症において病識の低下は50%～80%にみられる症状であり、治療関係構築の困難さやアドヒアランス（治療の継続性）の不良さだけでなく、社会機能の低さや再発率と関連していることが示唆されている。このため、統合失調症患者の病識低下を引き起こす要因の究明が求められており、これまで数多くの研究者が要因究明に取り組んできた。しかし、概念の複雑さゆえに未だに必要十分な説明はなされていない。

そこで、研究者は病識に関する複雑な概念およびその低下原因について統合失調症患者を対象とした過去文献をレビューし、認知機能と心理的防衛を原因とする2つの原因帰属論に大別できること、ほとんどの研究は認知機能低下を病識低下の原因とする研究であることを明らかにした。次に、統合失調症患者を対象に関係性の検討を行い、神経認知機能は病識に関係があるが、病識を構成する次元によって関連程度が異なることを明らかにした。さらに、病識を構成する各次元について偏相関分析と重回帰分析を行い、「自己の疾患についての病識」が未熟な防衛傾向と、その他の病識が神経認知機能および精神症状と関連していることを明らかにした。

本研究の意義は、1)統合失調症の病識に関する文献を網羅的にレビューし、概念と原因帰属論を分類整理したこと、2)病識低下を認知機能と心理的防衛の2つの観点から検討したこと、3)認知機能、病識、心理的防衛それぞれを構成する次元に区分して詳細に検討したことである。さらに本研究の知見は統合失調症に関与する臨床家だけでなく、当事者の社会復帰や長期的な再発予防にかかわる支援者にも重要な示唆を与えるものである。

以上より、本研究は統合失調症の病識低下の原因を認知機能と心理的防衛という2つの観点から複合的、そして精緻に検討し、今後の研究や臨床活動、さらには当事者支援にも影響を与えうる結果を示した意義ある研究と認められる。研究手法も適切であり、研究限界、研究の発展性も論理的に表現できており、本研究科において博士の学位を授与するに相応しい研究であると認める。